御文中雜考答問書

用捨抄

人

用捨箱下之巻

柳亭種彦編

東京帝国大学図書館

一 ぐりさま 芋の山

今のの齟齬なる事をぐりさまといふ。さまぐりを。ぐりさまといひてハ字元雜きより出て言前後なし義をるさでる辟言へハいひよるぶ轉じて彼ものの齟齬よつるゆゑ〜なり

俳諧破邪顕正 延宝七年印本 松月庵隨流著 ホ曰「清水の澄を。澄ハ清水ゆゑ。ぐりさまの。作意ハもるべし祇園林を。林祇園ゑハ[illegible]中略是を連歌ハてハ芋の山ゑ大きふきらふ俳諧ハてハぐりさまといふ」とのり。山の芋も芋の いとゝひてハ義をるさを蛤をぐりさまといふハ同シ

慕縊集 万治三

住吉ハて 蛤のぐりさまとそ水の月 立圃 代句又小町踊ニ

佐山中山集　寛文四年刻　重頼著

ゆりかひも何ぐりくまの生身魂　宗因

立圃の白い空よりゆるべき月を水中より見るをのひ。宗因い少とさきぐそ。ありがひも
るき老の身の残アをとふ。是齟齬なる意ふ近し。又俳諧良枝　元禄十年刻　警水撰ふ「人い
ゐる松ふひろるてゐの日かゐ」とのふ行助が句をうしき云云ふ條ふ「歌ふい老梶病
とらひ詩ふい客情ゐりとそ。嫌ふ。連歌ふい此格ゆアをを兼載い芋の心とりや
笑ひあいるとゐり」ゐどのふ事ゆれど。今の人ぐりくまいらひて芋の心とふい安ず

二　浄瑠璃本刊行の初

其角が著焦尾琴ふ「童謡歌舞のふ」を思ふ明暦年中の双紙ふ
登八橋下り八橋とふたやりゐる事ゑ十二段ふ分ゐゆり六字南無右衛門
正本と奥書しく作ることそ数奇ものゐふれゐる雅ゐべれ」とゆり其角ち

用捨箱　下一

寛文元年の生ゐり幼ゐき是等の草紙を翫弄しを思ひで當時の好事の
者南無右衛門が名をかりそ。かく奥書を記しゐらんとらひしへ。又綜年代記ふ
井上市郎兵衛　後ふ播磨　前ふい浄瑠璃の彫本ゐりアしうふ記ゐり。此市郎兵衛い
明暦万治頃の人ゐり。今傳ゐる細書画入の浄瑠璃本。寛治の姫きり。鎧ゐ。
贅。の類をゐゐふ明暦万治の年号ゆりてそれよりも古きい区。綜年代記い浄瑠
璃の作者ふも交アし西澤一凡の著ゐれい此説ふまさがひたるを友人雛波の
其樂子笑ひて八橋一冊を贈られゐり。寛永ふたや彫本ゆアしを初て知ゐり

○段目と記しゐるもめづらし
○やしまと　ひゐるが
標題ゐり
道行い
此段のをゐり

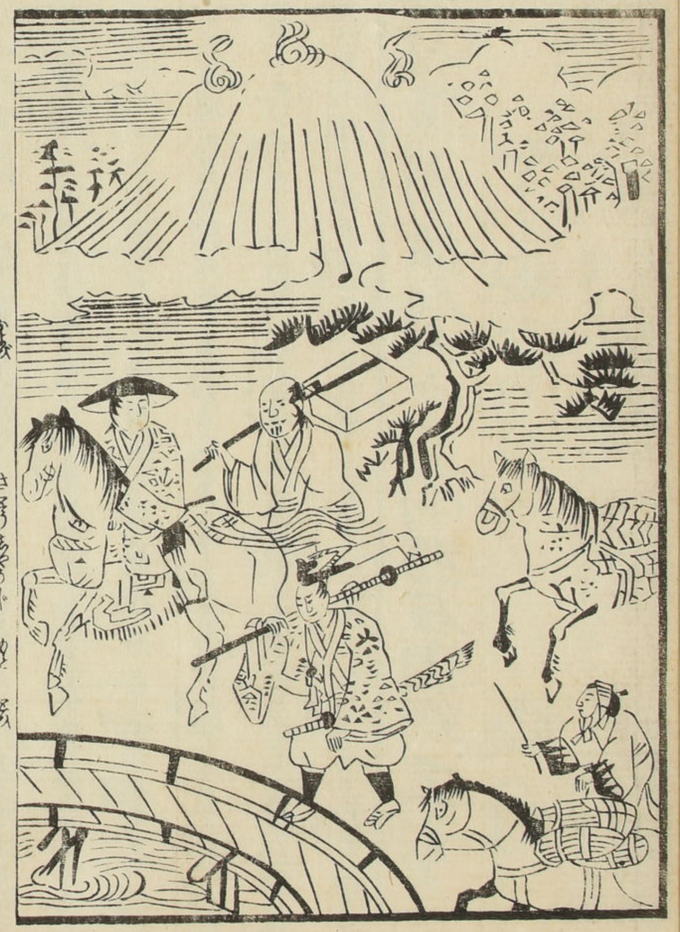
山城國住人六字南無右衛門正本

やしまみちゆき　一段目

さそをそのちゆきしい花のこやこをいそうゐ門ゐれ
いらいりのくとちゆ川やさをとんをゆしのむ〜かゐそうゐ

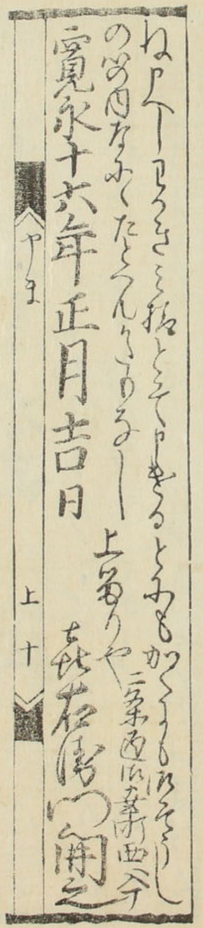
本文ハ用ひけれども首尾と画一葉を換る

全文總て舞のさまのあらはれき



○此草紙ハ義經ガ奥州及羽州ヲ佐藤兵衛尉ガ許ヲ訪ヒ支ヲ記せり。下ノ巻ニ出ル羽黒由利郡の地名。西海の屋島ヲ指ス

上の巻ハ四段あり十二段を三冊ハ綴りあるべし



此六字南無石清水の事ハ草紙ハ作るべけれど彼不幸ハ其書を得ず唯めぐらしかゝる東海道名所記ハ「浄瑠璃ハ京の次郎左衛門の者後ハ清路丞と受領」西の宮の夷かき紙ハさらひ四條川原ハ織田政清ガ事をかゝりて人形ハ物やつり。其後ぞうの姫。阿弥陀の胸割るゝ事をかゝる。次ハ河内左内と云者出て。女ハ南無石清水。左門。ゝたゞるゝとて浄瑠璃をかゝりける又古郷飯江戸咄貞享三年印本浄瑠璃の起りハ云云の条「京田舎遠國端唄まで」やゝる程ハ四條川原ハて芝居をたて六字南無石清水とハ入る女ハ来かゝりける十二段ハかりハけや人の哀ふれてめづらしかゝるとて。舞ハまゝ。やゝ。高館曽我ゝを

彼ふ〜ふかくりける」とゐるを見て女なる事を知るを傳系未考 西鶴大久敬 延宝八年略

ふ「淨瑠璃やゐるる凡の末の殿」とゐるふ「念願六字南無右衆〜」と附。又同

人作の讀本 三十不孝 貞享三年印本ふ「南無右衆〜節の淨瑠璃をかる」とゐふ事ゐれば

西鶴ゞ現在の頃までハ彼ゞかくり」曲節の傳ゐるそのゆ欲。備。雜波ゐ浜やゝ生

をめぐまれて後。說經淨瑠璃 三世壯大夫 とゐふ狡得ゐ是又摘用して左ふゐぐ

草紙の形 画風も やゝまゐふ かくゝぎを

与七郎ハ 代〜名を 徒て迫く 雜彼九

揭州東郡住 玉宮大夫

天下一說經ふも品ふ正本開

さんせう太夫 上

たくいまゐくりゐれゐくりゐふとやさぐたんごの

ゐゐるやきぐぞうゐゐるとあゝくとゐさそて

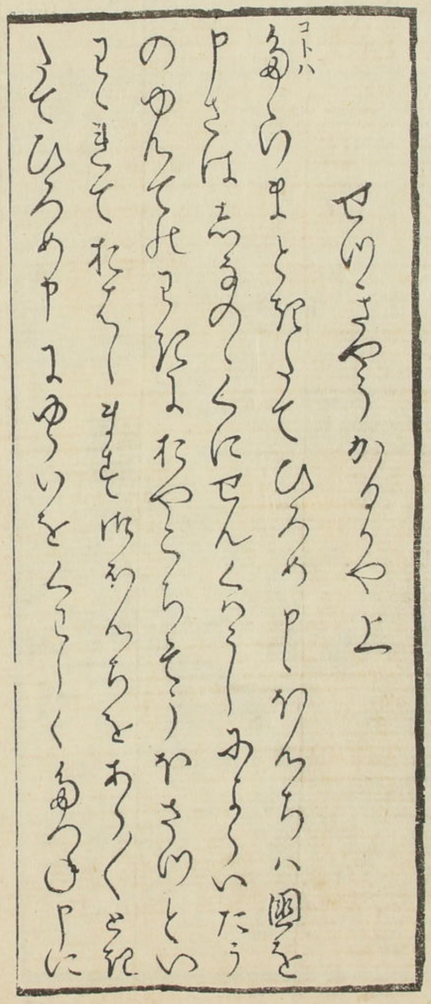
ひろめゐふこれも一さびいゐんぐんゐてゐゐゐます人

用捨箱 下 三

豐太子の 義ふ是を 再彫して 天満八幡宮 と奥書 あゐる ところぐを 削りて 書ゐめ ゐる めゐる

可惜巻尾ふ西洞院通り長者町とのを記して年号及板元の名ゐ闕

又友人豊芥子同説經淨瑠璃かるや を得て是も年号ありそなきまの
名ばかり載此さんまやうなきまの草紙と合せて寛永中大坂ゆゑ七郎とゆゑ者
ありそなやく説經の印本もいつ〜事を絶り此二冊ゆゑ綴て段を分ぢ前の二
本ゆゑ〜ぶれがるゝやの草紙ゆゑ大形なり。梅ゆふやゝまとこゝ庄なまの画ハ全く同筆
とあぢ しかるゝやゝ異なり七人比丘尼の画人なるべ 今伝る七人比丘尼ゆゑ年号を欠るゆゑ多〜友人伊勢の津ゆゑ住る春明の本ゆゑ寛永十二年とあり



用捨箱下四

寛永八年より今年天保辛丑マデ二百十一年

前の三荘左衛の初め丹後の國。錦焼地蔵の事なり。後のかるやき信濃の
國親子地蔵の事をいへ説經の微意を存し。なるほど。偖。やまかるやの
二本ハ板元喜右衛門とあるハ江戸通油町鶴屋の祖なり。浄瑠璃屋の号寛永八
年よりあるを見れば是より数十種の彫本ありし事必せり。さまべ初て刊行
せしハ元和年間なるべしなどいふハ撰しなる冊子二種ともに昔あるべき本とする
へし物の兼悪なるゆへ丹緑青を筆まるせハ彩色ともなく點じて最古雅なり。
七色賣の案ハ引なる小栗判官も必當時の彫本なるべれど未見

三 奥浄瑠璃

江戸馬喰町の繪草紙屋永壽堂西村屋与八ハ。阿弥陀の賜割。きりかけ曽我。
熊谷。の類の古浄瑠璃六七種元禄宝永の頃再彫しなる摺板なりとあり
近く文化中まで春毎ハ製本して奥州へのみ賣せり故ハ永壽堂ハ仙臺

浄瑠璃とも多く又正本とハ。奥州ハ今も是等の浄瑠璃をかたる者なり
三線ハなく扇ゆへ拍子をとるのみなりとハ彼地へのみ賣しなるハ此故なり。
按ずハ俳諧の句ハ見えしなる奥浄瑠璃とハ是なり

俳枕 寛文年間撰

陸奥

奥浄瑠璃緒絶の橋や古扇　調和

軒端の獨活 延宝八年刻 松意撰

琴瑟律疎ハ扇ゆ調ふ　昨今非
奥浄瑠璃頻迦の語り屋なり　仝

其袋 元禄三年刻 嵐雪撰

こちのくの乃こ絃きけば扇うち　鋤立

俳枕 ハ。三線なきを緒絶とハ。ゆゑ。古扇ゆゑ古風と存しなる紙なり

あるべし　軒端の獨活は。扇の調べにつけ　其袋は。淨瑠璃といふまでそれと空
きる利口なり。かれが彼地の淨瑠璃は昔よりこゝ線はるゝやうなるべし
再云此摺板偽り　阿弥陀の胸割は東海道名所記にもなし　赤鳥の巻
に六字南無右衆の作るよしを記されしより其是非は少時おき。文の古雅
なる標題の異やうなるゆゑ寛永前の淨瑠璃なる事は明るけれども永壽堂の
本に奥書なるけれが誰人がかゝりて江戸に摺板の残りを考へ得ざりしが不意
天満八右衆の名ある本を得て彼摺板の偽り　由縁を知まり
又云此天満八右衆は説經淨瑠璃のなまゆゑ芝居は堺町にあり　江戸名所記　寛文二年
の画は大薩摩が芝居に並び　野良三座詞　貞享元年印本に載る堺町の圖に出来殆
と中村善五郎が二軒の芝居はなきまれて北側なり　元禄曽我物語　十五年刻に「十文字
さつまが景清門破り。天満八太夫が加賀の道心」など並べのひ〜をたまゝ方治の

頃より宝永中までおこるなれ〜なるべし

風俗陀羅尼　宝暦十年刻　尺龍撰

冠　浮世のまゝに天満ぶし　甲州長沢●組
彼がかゝる淨瑠璃節宝暦の頃は廢て僅に殘り　事此冠に似て似ず若
此天満節の奥州に近くまで傳はりしゆゑ　大満八右衆の事ムこぐつ紙に
誰袖の条にひ〜如く世に香嚢の類おとるなれて白袋を蚊帳に掛し夏まで

鹿驚集　明暦三年印本

一く花は白袋　蚊帳草　撰者　春清

信親千句　明暦元年刻

前句　人知まゝ白袋　蚊帳　夏の風

附句

汐し　帳の内外くらき　夜

懐子　万治三年刻

床近き目ふ掛物を心あて　　撰者　重頼

句袋を帳屋のさとく　　是等の句おなじ　なり　之旨みて止

是ハ高貴人の臥ぬふまうけるべれが今もさる事なるをコヲガ知らざるあやならん

又おもふ　赤鳥の巻　ふ大嶋求馬の説るさて「昔を遊女いたるを浮世

狂ひとらひしるり傾城の宅蔵ふい柳を二本植て横ゑをゆひ布簾をうけそれ

ふ遊女の名を書て下ふこ角る袋を自分の細工ふして付しるり是を浮世

代衣とらひるうちしるなり」とらふ事を載られ是句袋るべし。風ふなふちて

自然香を散さん料るれバ帳へ掛るも同事のやうふおもへる。昔ハ去まと

ちの人遊女い更るり格子るどらひてそれふ次者も伽羅を衣ふ留ざるハあき

用捨箱　下上

さまるれハかるる餘情もるしるるあやならん。それが彼誰袖の如く後ふい香類

をのれぞ布簾の縁留とるやしなるべし

五　枕箪笥

何の器物ふもなれ其形のみ専あそるれ旦夕目ふ馴れが古くよりなる物

やうふ思ふるハ世の常るり埃枕ハいと近き製作るべれど若き人ハ名ぶふ

も知らぬ唯。枕とらふ物と思ふもなるめり。西川祐信の画　正徳雛形　の枕ぞし

の模様ふ形の似るハなれぞも今の如く縊とらふ物をつけるハ無。備此枕るき

ハい中人以下ハ皆箱枕るり。客のまうけるんどふや枕五。宛を重ね箱ふ

られ方なり。是を枕箪笥とらふり。古き調度を商ふ舗ふをりふふれてあり。小口を

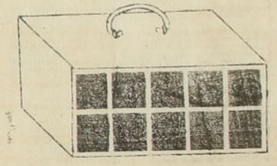
黒漆ふて塗紋所を金粉ふて小時繪ふるるどなれバ下賤の者のみれ相枕を用ひし

ふハなるぞ今も旅籠屋茶屋やうのところふハ此枕箪笥のなる欲不知

京大坂茶屋雀　元禄六年印本

一名　諸分調方記

ふ載る圖　箱　枕



此茶屋雀のかうふる十の枕を名がき言草紙をなぞ今藝洲宮島の遊女枕二ッを紙ふられ鐶ゆそひきさげるやうふ志る紙ゆて来此形ふ似りとぞ。

塵取　延宝七年刻　常矩撰

大形の恨そのの数も十年を
東雲後重ねてうき　枕箱　風病

市陸帯　元禄四年刻　児水撰

春雨ふ九ッあるる　枕　林鶴
誠なる人も多くおのれ一人寡なるかな

焼真千鳥　元禄十一年　桃隣撰

木枕や十人まぢるる夕　紗　琴風

用捨箱　下八

四五百森　元禄七年刻

桜　千こ無や　隨分の　用　撰者　示因
勝　月　十の　枕ハ十所ふ　仝

而形集　平砂句集

木枕を八卦ふ配れ夏座敷

かる句でもの不ゐれば昔ハ此枕箪笥ぐれの家ゆ物ある屋。又

江戸筏　享保元年刻

前句略
十人前そ　枕りやー　き　青峨

とぞ吟ずる事ゆ思ふふ享保の頃いとや塚枕ゆとるれ箱枕ハ廢るるやうらん

又曰　河念佛　元禄十四年刻ふ「枕ぐんを次きみる伊勢骨柳ふ何ゆうちられ」とあるハ縁の用意ふて枕迩くあく箪笥の事ゆ。ゆ迩くあく紙ゆ箪笥とぞふ同

六　夢想枕　夢想流ノ髪

夢想枕又入子枕とも云ふ。是は。五ッ或は七ッ入子なりする箱枕なり今もあるべけれど江戸にてはかとるなれば總物に夢枕と名つくるは神佛の告なんどゝ云ふより移りて不思議とゝ云ふ程の事にて物の形の変ずるをゝ云ふ。一ッかと思へば二ッにもなる不思議なる枕とゝ云義なり。裏なと思へば表にも変を夢枕羽織。抜にて張つめゝ

とゝ云るが密なる所夢想密。引出しのあるさへも抜なるが夢想引出し。此類多くあるべし。或書に夢さう尊尊を夢窓國師の持ゐゝ調度をうつしなるなりと記しなるは信ず雖し。夢枕は相摸の國なんどにて昔は專つくりなる東海道名所記万治に「小田原足踏。けやきの丸木履なり。夢想枕右宿の右の方に外良なり」とゝ云事なえなり

水朝文盛に夢枕の事あり

坂東太郎　延宝七年刻　丈丸撰

近年又同名の俳書あり

用捨箱　下　九

夢想枕神なるを神郭公　昔吻

伊勢宮笥　延宝八年刻

星祭り七ッ入子に為るよけり　撰者　心友

小町が庵の客枕乃為曲言

餘花千句　宝永二年

浮田殿より くいひより　状

交ての枕をぬくも七ッ組

又かるる草紙の標題に入子枕　正徳二年　とゝ云るも同おもむきなる話を五ッ組合せなるの意なり。夢枕筆。夢枕行燈なるど物の本にえゝれどめづらしかるべ略つ

天和笑委集　三年の記に上野へ花見に出るゝ女の事をゝの條に「その品とるゝて染ふ考尺五寸の大振袖着短くつま高く当世やうのこゝなぶまるさて二ッ二ッ四ッ

重袷きて雪の肌をちらと見せ襟ぎんきらーかくろげて出立もあり。一ツ巻くひき合せ小づま切揃へて巻くるもあり。腰ふのまれる丹前帯うしろきりてとゝ引ゆるんー吉弥やうふ結ぶもあり。前よまきてかくしむすびふまけるもあり。紫縮緬を細ゐて。腰もきれよとゝ引まわして。是も前ゆて結びあげ。髪ハかうぶん張田ゆげ。御所の女中の美想流。おつ取かうぶん蒔繪櫛。ぶんぶを丸綿ゴけよくかぶり。加賀の菅笠づら笠。ゝとくまーき丸ぶけの紐。白きうもざー袋足踏。紫竹のざうをだう繻のせきぶ。ゝれかこらーとさーを風流ふ出立」とゝふ事あり此文ゝ百五十余年前の女丸風俗を今眼前ふるぶ如ー。桜ふ美想流とゝさげ下地ゐるべー片えづーの如く見ゆる鬘の丼を抜ば下髪とゐる是も形の変ぎる故如此名づけーあやあらん

七 瀧井山三郎

用捨箱 下十

○柳亭日肖像ふい詩のゝを題ーて評の内ふ多ふ載ゐるをひとつふ記ーゐる

瀧井山三郎が。此「垣下つれく草」に見えし如く寛文中。人に愛られしかぶき森の上手也。梅がつまとなる狂言に名あり。江戸の流行物を集めて「短歌」に略「浪人猿を退治して。八人座頭の。見世物に。仁王くの助が。大力。見ふる人の。布引の。瀧井山三郎が。女がた。おなじくい盛とる」中略代くも豎ゐをきまれば。ちんぶんくと楽しけん」と短冊に著「還魂紙料」又。花村幸助が傳「一本草」寛文十二年写本に「是ぞ浮世の中村が。世之居に並居る輩は。清き流れの。ありてくる。瀧井山三郎が森の名に。部羅場花とるとうれ」などの事なり。桜まるに「西鶴一代男」五の巻京師霊山の事を以條に瀧井山三郎の名なり。是寛文元年の頃の事を記しるせり。又寛文二年刻江戸かぶき小年の評書「剝野老」に山三郎を不載。これ当時寛文の初に京の産にいるべくもぞ。備。此山三郎

若しくは延宝の初に没しなんと「古今役者物語」延宝六年印本に「流れも清き玉川のせんのおとうとぞ主膳とぞ野良とあり。元の水上なり。さて又瀧井のあれとも消てなくなりぬ山三郎云云」と記して彼瀧井が名をとどめ梅がつまの狂言の画なり。次に模本又「三茶三幅一対」延宝九年印本に江戸ノ町二丁目大黒屋内初鶴とらに遊女を評する詞に「面鮮やかにされどおりてあやをなす中略さる人の曰。瀧井山三郎に似たるとぞ。さてこそよくたとえたるぞ。まく。瀧井くもやくみはなりけるに君ちすあるるがく全盛ちの人」又「西鶴大鑑」貞享四年刻に江戸の事をいふ條に「野良の花れ姿玩櫻木に彫て一冊とせしを居るがく美形を翫ぶ事重寶ふるがめくもに略と中とも意風に筑波根の嵐より落る瀧井山三郎中略恨めしの浮世のるるひさされる花の村雨往来の雲霧十九の名殘り平生の顔色い病中に衰へ芳鮮眠るが如し」などいれば没して後までも墓ふりのおやかやしるべし

虚栗 天和三年 其角撰

小袖恙せて俳句へ梅ゞつま　其角

元

是山三角ゞ追善の句ゐゐゐ

通し糸を巻て回轉の機をまうけひさまくふ是我愛し此孤樂のこゝ
ふ記を書て曰。獨樂よ汝時を得さう一こゝろ楊弓の相ふ催促
せらまき行成の紙袍を着て射ともの座ふ連りしさ玲らしき事ふ
らひ〳〵ふ今い綾錦金襴の衣服そうびやうふ。まい紅紫の組糸を
帶とし猩々緋羅紗の蒲團よ象牙琉璃の杖をつき一曲の舞ふ錦の
袂を翻せば滿座頤ふ解てよろこび。洛中の男女貴賤を厭ず汝が舞振
の久〳〵からん事を願ひ汝が藝の他ふ勝ん事を思ふと妓女を仕立るが
如し五節の舞霓裳衣の曲。さかぎき。永代橋。何れの曲ふ長ど高物を
賞美せらるゝ時代時繪のれ相の中ふ豊ふ眠り。青銅鳥目の幼名を
削て助六とのひ。文七と名ふ。柏崎と呼き。松風と号し。さるかゝぢ〳〵と高
位ふ淨ゞる料足とのひ淨ゞ〳〵と名づけ〳〵ふ獨き名ゝれど今汝が花やら

用捨箱 下上四

ある威勢ふハ誰のゝて俗性をのふ者ゝく云云以上摘用非全文と記〳〵す多ふ
文六や髭の緒きゝて花二寸」とのふ句ふ載さり。又諸分床軍談年号ヲケ正德の頃歟
五の巻大坂新町の事をのふ条ふ「勘七の名ゝ鼓持紙入よりさゝと錢をのぐ〳〵
金入の煙草入きゝとゝりて早東錢ふ車をとゝらゝ奥座敷へ持てまゝり
て来ゝるとまゝひき。此事ハ京で錢ごま江戸でハ錢車とふのまゝ此所へハ大坂を
今ゞゝでめてぢや女郎さま分ふかう緘をかけて。ゝう廻〳〵てお目ふかきや。
此舞うちふこ味線ゝ〳〵 ごこ遍引ゝる。淨瑠璃ゝ〳〵道行一ッかゝるゝる。
〳〵ふ舞てゝゝるゝどふ。お慰をゝ〳〵てごらんじませ」とふとゝのれば小兒の戯弄
のゝふハゝ〳〵酒席ゝどへも持のて奥とせ〳〵ゝるべ〳〵。備玉欄筍ふ記〳〵獨
樂の名を考ゝるふ文七。文六ハ少ゝ〳〵如く。文錢の數ゝり。助六ゝを一中節の
淨瑠璃「蟬の男けがら」ふ万屋助六ゝり是ゝり。柏崎。松風ハ誰〳〵も知る

謡曲なり。其曲殘らざる間。彼助六の道行を語る程。舞やまざりし賞ふかく名づけしものならん。をかぎ永代橋ふ長じとなるもがしきの譯ハ既ふ序軍談ふなり。永代橋ハ「松の葉」元禄十六年刻この卷ふ載。ゞゞめふ。願ひもいとがけはくもとありて。永代橋ふぞ差ぬふとのふをとる端歌の名あり。是又それをうくさ程なるく舞を誉て長じとハのひとるなり。再桜ぞるふ近く「若緑勢曽我」享保三年正月ふ二代目市川團十郎ゲ外良賣の詞ふ「まづ一粒めしのぐて どらうしゝなるいにの中の源しさゲかくべつる物。さるふよりて舌のまくふ事ゲ殘獨樂ゲ裸足で逃る」とのふ事なれバ享保の頃までいまゞ戯ぶ者もなりし歌因ふ云鑒水ゲ文ふ錢の行成紙ふてまれし事を記しゝ發語ふ。一ところとのひハ天和中をさしゝる歌「時隨筆」天和三年著ふ「近き頃京洛恨速の老少楊弓を戯び云云一錢ヲ餓鬼二、ツ地ニヲ山。五ヲ於洲賀。十ヲ六ヲ。廿ヲ草冠。百ヲ牛とを」とのふ良見えたり

十 俳諧の句を狂歌と誤る

亡友曳尾庵。文禄慶長頃の古画ゆとて色紙形のちひさきふ花鳥人物の類をゆるりき。上ふ宗鑑ゲ犬筑波集の附合の句をちひ書ふ者ゆ殘羽せり。是ハ屏風障子ゆんごふ押ゆ料ふ當時ゆこゆるとて犬筑波の句ゲ出て粥帛しゝ物ゆりとを。偖彼ちひ出ふ者ゆを心ゆき者ゆ狂歌ゆアリ思ひ違へ写ゆしゝ口ふゆらひ偖へしゝとゆゆしき事ゆアリ雄長老「新撰狂歌集」元和年間撰ふ「大般若たきやうくんどくさんのひもとく」「前句」とゆるい狂歌ゆハゆゆ彼犬筑波の附合ゆり。又「扇の草紙」とのふゆり殘闕を見て刊行の年号い新しゝぎれでも。五色の紙へ摺。角の義本一名光悦本とゆるふる物ゆ狂歌集と同頃の書ゆり。次ふ摸ゆ如く扇の形ふ画ゆり。上ふ誰くも知る古歌ふ交て狂歌を題ゆ。是ゆも犬筑波の句ゆり

月ゝ
夜の
こゝろの
きゝを
はきり
くもり
あり
きり
たくも

扇のさゝし

書画ともあき摸し

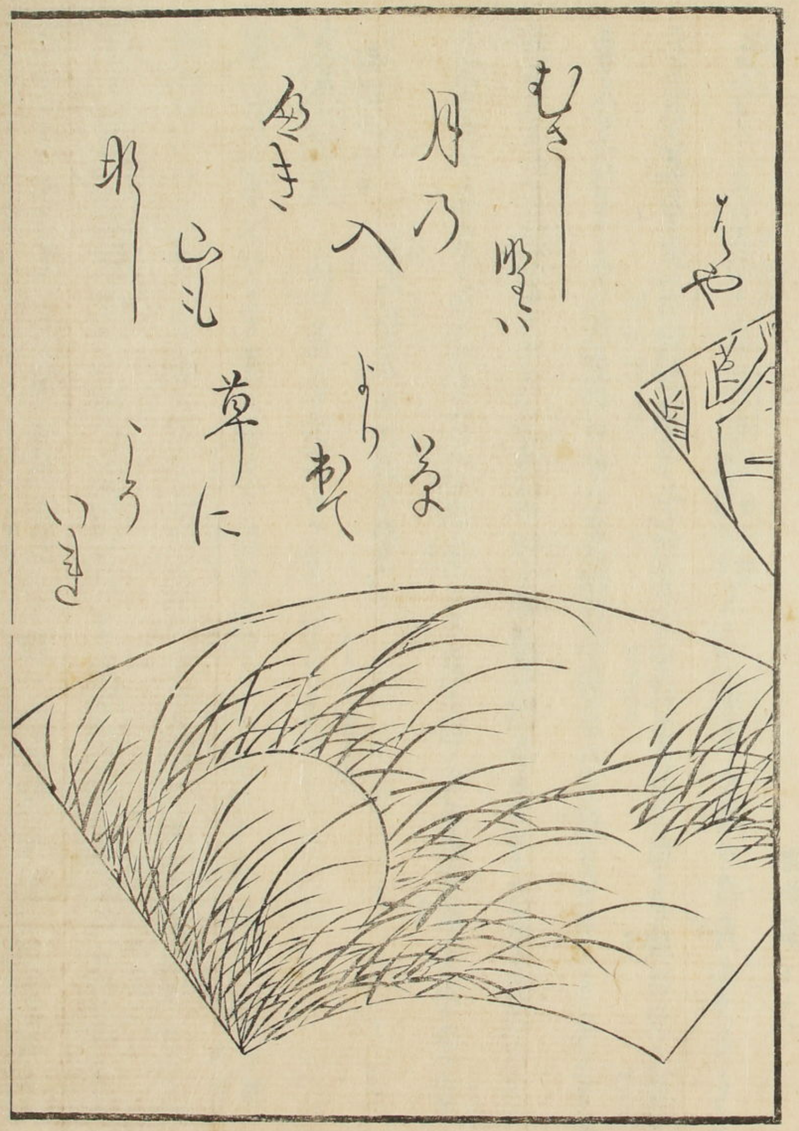
後ふ辨ずる如く
はこ歌犬繰波の
附合
下の句前句
上七ゝ甘句

形

こまおす
あま
たゝ
ハを
ゆて

四ツ
こゝの
ゝに
ゝう

うひすの
花
ちらひ
かそ
ときと
大る雪
なりて
さめと
きえ
○寛永後の俳諧ハ
此詞をこりうる句
多くなれども考証
ハ用ゐられが悉略
俳諧古道具ハ
載べし


むき
月乃
入
草に

前のこぎ出を船。月かくす花の小枝の。二種い。彼大筑波集の附合の句なり。
後の大長刀。武藏野。の二歌い大筑波ゐ見えざれど前の例ふるゝへい是又古き
俳諧の附合なるべし。大長刀ゐざぶとゐえんとゐふが為の句ゑ。強歌。山賊なんどの
ゐのこふれし事をゐえ。嘗の細脛と狂言ゐ附るゝやうゐあもなる。桜ぎるゐ。文安五年撰
古莵玖波集 俳諧の初ゐ

散花を追かけそゆくゐのしるる
大長刀よにぐる嘗　よゝ人考べし

とゐるい此花ふこちらすとゐふが比集より前ゐ知りて。それを取る句なる事
必せりされば狂歌ゐも せよ ニガ 考へへの如く俳諧の附合ゐもせよ大長刀の方も古く
なり人口ゐのこりなり。武蔵野の方い古き物の本ゐ見えざる歟。是も草より出て草ゐ
こそられが為の句ゑ。虫歟細流などと。附べきを。案外なる月を出して狭き句を廣く
こゝとゝるなるべし

俳諧抄 奥書行年七十五宗鑑ゐ 前「中ゐ小鴉の沙汰ゐなりそもる」

用捨箱 下十八

附御「おもへどそ備前国の物語を」とゐて宗鑑の自注ゐ「け句 所字ゐなり」
ヤス人ゐれども此類くゝかるまゝ」と見えられが昔の俳諧い為句ゐ附句ゐ同字
あるをもさまでゐい嫌ざり」なるべし。武蔵野の歌ゐ。月の入べき。草ゐとそられ。耳じろ
同字なり。附合の句とせが免さべき例茲なり歌ゐそいゐのゐべくぐ。元和三年
徳永種久とゐ人の紀行 江戸くだり ゐ「米あくべまけても賣や六合ゐ比病
もだて誰ゐ川流。弓なを見れが。武蔵野い月のゐるべき山なる草より出て
草ゐこそられと。古き歌ゐも詠れ」とゐるゐ扇のさゝを合せそれいたやく
慶長の頃古歌なりと思ひゐのやまもあるべし

十一 下帯を手綱とゐふ

今の下帯を綱とゐひ事ゑ考を記して後經平子の春渓浪語を見ゐゐ
其説最細くれが。ゐい破捨んと思ひ事が近く。えなと音便ゐゐひ事など

俗書ハ見えさるハ載られ難ハ其かさちを記をべし經平子 義貞記 を引れしう
今傳る寛永の印本ハ「鎧可」着次第の事。一番浴衣二番小袖」とあり其
後の刻本ハも如此記してる綱とハ無。是ハ昔書写しし者一番を綱とハ
ゞ解せざるし故私ハ浴衣と改めしものるべし 鵜鷺合戰 又曰猫魯物語 兼良公御作と云 ハ鎧着
用の順を記しぬひしハ一番を綱とハ二番以下 義貞記 ハ違ハ事あけきば
古き義貞記ハる綱とハ下ちしし事必せり。此ハ春溪浪語ハえる書ハ略つ

守武千句 天文九年

町へハ行るるハ下りめしく見る
綱をばかゞ袴ハ不ころびて

今も下帶をあむるとかくとハ古今著聞集ハえ云 又 醒睡笑廣本 元和年間 五の巻ハ
宗長法師ハるかさハ曉ハそぎかるとて下帶をりとる

相撲箱 下十九

かゝれし殘指せておくりれば綿てつるナす
思ひきやおとゝとしろなの濱風ハ浪ハ寄る紀名のたんとそ
同書六の巻の輕口話ハも又を綱の事ハり宗長の歌とハハおぶつるれど元和中
まゝハ此名のハのやし証とまべし又近く 正章千句 ハ 正章ハ貞室初名ゝ
相撲 ちりぐハのれし中
かへさるくかさのたんるあけくて
正保四年の吟ハり是より二十年ゐて寛文の半一雪とハ者 茶招竹 と題する
草紙を著し正章を批判しハ句を前の相撲ハ附ぎと雖ゞ貞恕 蠅打 と
ハ書を作ゝて是ハ答。えるとハ下帶の事ハりそれを附紙とハハ。とハるハて
思ハハ正保の頃まゝハ音便ゆてえるとハひ寛文の頃ハその名も人知らぎるゆし
なるべし。因ハ云 見聞集 慶長ハ記 一の巻下帶古ハかえる事の條ハ「えしハ昔ゐ老

ある頃までハたゞの帯ハ麻布杯を四五尺程ふきり中より二つに割ひとしるし
方をバ腰へ廻し前へ結びしりしが當世の下帯ハかゝりしり中略今ハ世上豊
ゆゑ皆人福ゆたかゝ又杯の和る物を腰へ引廻し片結びにせり」とハ
事ハ古ノ有き頃とハ天正の半をさしていとそれしるゆゑかれバ今の下帯の製ハ
慶長中を始るべき

十二 別當とハ俗語

神宮寺の類を總別當と稱まるハ誰こも知る如くその神を守傳ふの義なり
それゆゑ轉て俗語の別當ハ我まゝふのつゝひぴゝに海ふ物など喰ふをいふ童の
菅神なんどふ果子やうの物を備へ。それ我取おろして喰ふをお別當をまるとハ
是なり。夏の夕ゆゑ飛來る青色の虫を夕顔別当とハも夕顔の花ゆゑ
いり我ゆの顔ふふるゆゑ故の名なり。北越ゆゑ蝶をさゝべうとハ所あるよ

近年發販して世ふもてはやる「雪譜」ふ見えたり按ずるふ「伊丹發句合」寛保九年刻
才麿翁の判の詞ふ。蕎麥の花ハ蜂の酒。とハ讓ゆり是ふ對見れば。蝶ゆりハ
ちゝふ花の蜜を吸ふまの酒をのむふ似る故酒別當と名づけしゆゑふ
ある。又蝗を實盛とハも原ハ稲別當などゆゑを坂東の農民長井別當
の名なるきより戴れふ實盛と深語のやうふゆゑるが遂ふ諸国へ廣まり
ゆハゆゝぎや。古の遊女の別當今もハ廐の別當も此俗語ふ近し守傳く
の義ゆゑハ必え雜き歟 昔の馬屋の別当ハ
今ハ馬役の類なり

十三 太郎 次郎

非情の物の魁なるを太郎とよび。それふ次を次郎とハ事種ゆり刀ふを郎
太刀次郎ゆゑ刀。盃ふ。ゆゑ郎貝次郎螺。利根川を坂東ゆゑ郎と名づけしも
關東の大河なれバなり。嵐雪が紀行「その年の冬」宝永二年ふ曾根ゆゑ郎をのゆり曾根

次郎をんぐるとゆるい伊勢より紀州へ八鬼山越の坂の名とゆゑ。南都の大佛の鐘を奈良次郎とゆゑ是より大る海を郎とゆふ鐘ハ遠江國の海の底ふ沉てゆりとい信ド雑き説みゞゝ彼地の人の常談る。雲の峯を。江戸ゑ坂東太郎。京ゑ丹波を郎曽根次郎。九州ゑ比古を郎るどゆゑ其地の山川の大るを雲の名ふ付ゆ〜る。浪情の物を人名の如くいひなをを原東一時の戯をゆてさまりでふなきたとんきこのやうゆもかゆもれ稀ど爲憲学生の著 口遊 ふ「山を。近二。宇二。謂之大橋 注今案ルふ。山をハ山崎橋。近二ハ勢多橋。宇二ハ宇治橋」とゆり山をハ山崎を郎の略。近江二郎宇治二郎といゆる。唯。二三とかぞるのこるらび。山一。とこゑゆるべれ。山をとゆるゑて二三ゑも郎の字の略なる事明るり此書天禄元年の作今より八百七十余年前大橋をを郎次郎と〜る事えゑくゆり 此口遊の注ハ弘長二年ふ書〜ものともあれど山をとゆふ事ハ如此本文ふゆり 拾芥抄ハ全ク書のきふ書うつされ〜るるべ〜

俳諧の句ふハ此類の詞ゑ私ふ製〜とゆゞ〜きゆり

隠蓑 延宝

雑芸

初雪の花の兄きや富士を郎　伊安

俳枕 延宝

雲や磯空ふ知られ出富士を郎　良景

田鳥集 元禄十三年印刻 三千風撰

余所の雪抓んでゑて富士を郎　能榮

前句附歌かるた 元禄十三年刻 洲崎の堂ハ松の木かれ

涼船その雪をゑげよ富士を郎　作者不知 其角高点

茶の例ふらんば駿河を郎るんどのべき後彼俳諧句ふ製〜故ゆえよき

なゆふうちひゝめて富士を郎とゆひ〜るるべ〜

猿蓑集

廣澤やひごろ志ぐる沼を郎　央邦

山のを郎ハ富士なり。川のを郎ハ利根なり。それ芽ふ對して。ちハ沼のを郎なるべとなりたて。余所ゆハ知らぬ時雨ふ孤ぬるゝと廣澤の廣き光景をのひなるあり。池を郎とふべきを沼を郎と轉じゝるハ俳諧のたゝらきなるべ〜 本朝文鑑ふ載る支考が酒盛の移文ふ武藏野織部なんど不盃の名をなげて。飯椀のを郎に肝をけしとなるハあまりふ狂じゝる書ざまなるゞ廣沢を沼のを郎とし。椀を不盃のを郎とするも其意ハ齊。是前ふなふ私ふ製ゝる洞なり

此条ハ亡友曳尾庵の説ふ予が考へを添ゝるなり又或人の説ふ近江國の方言ふ鴈ゝ沼を郎とふそれなるとと。按るふ鴈を沼を郎とふ所もなるべれど京師の夕ゝ他国の方言をまもりてゝふ蔑きゝまもるし〜

此廣澤やのやハ古歌あも例あるゝん曳泳のやゆそゝいふ かゝゝやなり俳諧ゆそゝいゝゝ。白炭や燒ぬ昔の雪の枝とふやゆそ。白炭ハとふ事なゞ是も廣沢ハひごろおゞゝとなひしゝなり。此や。ふるハかゝえず廣沢ハとハいれゞれバ鴈の事ゆハるゝぞ熟なのぢゝひぬふべ〜

十四　天ゞ紅　尼が輕粉

夕陽の暉赤雲ゝ紅のまゞ空ふとふハ天の紅なり。又一種。女僧の尼の字を書べきなり。是ハ今絶ゝる童話なりて童謡ゆもうゝひ〜やうふおもゝる今ゝゝをふ其童話を他ゝてゝなんバ。昔一人の尼あり他所ふ隙〜夫を持〜ゞなる時頬紅ふかのつけて粧ひ。彼隙〜丈を待〜を尼の父母ふ告るゝのなり親おごろ紀て尼を叱て懲〜ことふ程の事なるゝ〜あるべ〜 節用集大全 延宝八年印本 阿行「尼紅粉　注倭俗呼赤色之雲曰尼紅粉」となり尼の字を書〜ハ彼童話ふ混〜ゝるの誤ゝなり

鷹筑波集　寛永十五年刻　西武撰

親ふあらら迷惑やまちが
尼が不よつけ（頬）する爲ふとりぬぐひ　日能

崑山集　慶安四

六ノ巻　鼻花なるまでも紅粉をつけろ　尼柘榴　重吉
七ノ巻　尼が紅つけて稲妻待夜このあ　道清

道清の句い天が紅るれども彼頬爲ふの事ふとそ〜る故、尼の字を書〜と必せり。慶安の頃までいたの童話の如〜証とまべし。前ふひ〜如く踊を小歌の安宅い何ふよりて經を読る欲「尼がべふつけてそやかふいそうよりふとう大事ふそろてふをよ坊主ここ大坊主」とかるいは事をひ〜古き童謡る事明るり必出所あるべけれど未考。以下い童話ふかえるぎる赤雲の句るり

用捨箱　下　北三

玉海集　明暦

下紅葉空ふうつまや天が紅粉　朝慶　昔爲ふをろまこ ひ〜を今ふて いへり

新續大筑波集　万治

紅葉せ〜尾上がたけやかのまがべふ　重明

紅葉を赤雲ふそやをる〜〜り次の句い表裏ゆて赤雲を紅葉ふ見ん とのり

蔭枝集　延宝三年刻

阿波國典行　紅葉ふる万ん里の海士天が紅　撰者維舟

隠蓑集　延宝五

かのまが紅粉の末つむ花りめたるをさ　似舟

如此天かのひい圖字ふ書て昔い赤雲ふ尼の字を出〜るふをえず混ど誤ま〜い

延宝の末るべ〜

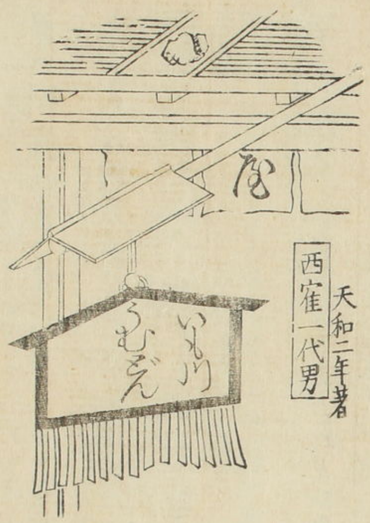
俳諧住吉物語　青流撰　元禄年間刻

山ふりこ尼が紅さす　彩田雲　重仲

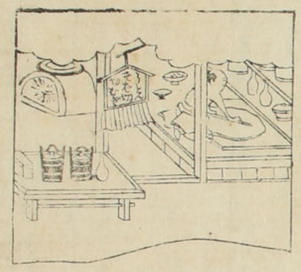
昔の例よりもこの此句天の字をかくべし是のごとくすこしあるべて尼の字ハつられて。又京橋中橋おまんが餅ふとゝいふハ江戸中橋ハ満稲荷とて紅粉を備願ごめもる社今ハ在。享保の頃奇特の事ありて糸清群集あるる刻の童謡るゝとゝそ是も又天の紅ハ混じ赤雲を見やりを拍てうふ童今もあり

十五　温飩の看版　芋川

昔ハ温飩おこるゝれて温飩のかさゝふ蕎麥きりを賣。今ハ蕎麥きを盛ハるゝて其傍ハ温飩を賣。けんどん屋とゝいふ寛文中よりあれども蕎麥屋とゝいふ近く享保の頃までも無。悉温飩屋ゆて看板ハ額ゆるゝハ櫛形あるる板へ細くさりゝる紙をつけゝるを出しゝが今江戸ノハハ絶ゝる。寛政の初までハ干温飩の看板ハ彼櫛形の板ハ青き紙ハて縁るゝ成ゝるを。軒へ掛さゝノハあゝあり一枚



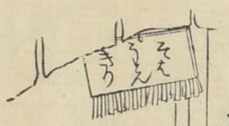
天和二年著
西窪一代男



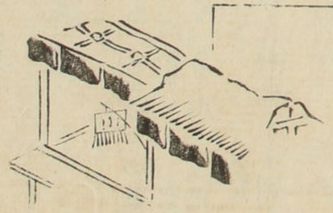
元禄十一年印本
道戲與ハ

勘板記麺類
朝早鏈花鰹

と記しゝ上よ摸しゝる
一図あり



人倫訓蒙圖彙
元禄三年刻
蕎麥屋の軒へ
つるゝあり



享保年間彫折本
江戸八景のうち
品川の飯帆ゝ
此圖ゆ

桃の實　元禄六年

折う海のくう温飩屋の幣　撰者　冗峯

吉原いつざこもやどく茶筅髪　嵐雪

とあるをば吉原の温飩屋なる代看板のなりるべし。又按ふ[一代男]二の巻ふ為る摸しる画巧載る條。二川とふ所ふ旅寐して云云なりて「芋川とふ里ふ若松昔の馴染なりて人の住なしる笹葺をつぐ所の名物ひう温飩をる刻て」とふの事なり。此冊子より前[東海道名所記]万治元年作四巻ふも也鯉鮒より海まで云云の条ふ「伊そ川。うどんそを切なり道中第一の鹽梅よき所なり」とあるを今平温飩をひもかそと云ふ芋川の誤なるべし、其さまの似るをもて芋洲とこそひもかそとなるべし。されどひもかそとなるべしも又ふる〜[誰袖の海]も芋川の事なり

冨士石　延宝七

題い春氷るり。當時ちやくひもかそとなり。今も諸國の海道ふ彼幣ぬきたる看板なりとそ。又温飩の粉を練て尉ざるなどの形を偽るるべし。鏡餅の勢ある物を甚至ふ載る看板田舍ふハなをと吟り

ひもかそ温飩捨水碎く氷のふ　調川

[十六]　大女房阿与米　附甫春

近年大女淀瀧とふ巧見世物ふ出しぐ。昔も彼ふ似る女なり。[松會板年代記]天和三年新彫延宝二年の条「江戸堺町ふ四ッふる子力持石臼ふ銭四貫文の世持あり。十一月近江國より。さけ七尺三寸なる大女。名をおよめとふ見世物ふ出を」と見え。又[續無名抄]延宝八年惟中著上巻ふ「近頃道頓堀ふ中略頭大甫春とふ者あり顔色常躰の如くうつくしさ人ふとえさり其さけ一尺二寸足脛をゞれて細く四五歳ふとえぞ梅花心易を誦ぞ粗書をよくして義ふ通ぞ又大女房なり江州の者

あり白髭大明神の變化なりとらひつくふぐけ七尺二寸足のるゞさ一尺三寸。
手のるゞさ一尺。全身もぐれて骨高くカ人ふこえ達者究竟の男も勝れり」
色ゞの事いのり當時の俳諧ふ大女房とあるハ此おとめゞ事ゐ[illegible]
おとめを見世物ふ出し[illegible]きのよく丈を高く見せんとそ
足踏ゐたゐせしとあゞしく下駄足踏の白ふ附ゐり

延宝北歌仙

古足踏猛火と燃なゞそ　嵐窓
大女房の　大蛇いろく　仝

西窪大矢数　延宝八

下駄の鼻緒や春雨の空
大女房一丈二尺　雲川　霞

向之図　延宝八

用捨箱　下　[illegible]

大女房それさへなるを富士の雪　如鐵

杉村治信の画本　古今男　天和四年印本の頭書ふ「近頃堺町かぶき見よまろ」つゞいて
小芝居の前を通りしふ友のふ。るふと保春とあよめとらふ大女房と競て見さ
をゆくる。のや郷る。腹をかくる事よ。まづ保春ゞせの高さ三尺一寸あるめゞ
大さ八尺中略天井よそぐく程ふ高くそ色白れば鹿子まゞるの富士の如し
保春ハ加僧也土人形の西行法師ふ似る」とあるも　續無名抄　の如く彼二人
を反對ふいる。桜ふ　二代男　貞享元年四の巻ふ「ある夜又道頓堀の火屋ふ一寸法師の
夏書して居るを心をゝめ見れば甫春ゐり」とあるを見れば甫を保ふ作りしハ

古今男　の誤りゐるべし。又。其角の著　吉原五十四君　貞享四年ふ

梅がえ　櫻木

大女房あよめと申る。ちんちくまんゞ妹小雀とや實よく似る大廣袖の

中より這出さると世の人の笑ひ二木よりでる連ごちての道中無用さるべ。
ゆゝしきのぞく」とゝひしゝ。梅がえい身のしけひきく。揺木をたけるさを彼
かゝるゐふ比て誹しゝあをを

十七 袖頭巾

袖頭巾一名御高祖頭巾とゝふ物ふるき草紙ゐ見えぎ宝暦八年の写本
愚痴拾遺物語ふ「一両年以前ゝりをゝき頭巾ちゐる袖頭巾とゝふ其原ハ――
頌光とゝふ坊主品川へ通ふゐ高祖日蓮上人のかぶを物ゝり思ひつきゝゝゐり始ゐ
頌光頭巾とゝひけるとゐり」と記ゝ。又我衣ふ「宝暦元年大坂より中村冨十郎
とゝふ若女方下ゐ宮風を防ぐゝゐ紫縮緬ゐそ帽子をゝゝゝ人ゝゝ時のゐき女是を
かぶりゝゐ男もかゞる着ゐり其時の人是を大明頭巾とゝふ」とゐりて袖頭巾をかぶり
たる圖を載ゝり。按ふ。頌光。冨十郎ふ起ゝゝとゝふ両説をもふ非ゐり宝暦元年

用捨箱 下 廿七

ゝり十八年ゐ享保十九年印本櫻鏡ふ

花盛をそれゝゝゐゝゐ袖頭巾

江戸町二丁目
平野屋平右衛門
ちのく

とゐりて此草紙ハ吉原より浅草寺の境内へ揺を植ゝ刻の遊女の句集ゐりを
此揺を千本揺ゐりとひハ札櫻とゝふハ奉納ちる遊女の名札木毎ふ結てあり故ゐりとを

繪本金龍山千本櫻ふ載さる圖

此さゝゝふ年号ハ
見えざれども揺撓と
同時ゐる事ハ標題ゐて
明ゐりされバ享保年間ゝり
此頭巾ゐり

画人ハ
奥村政信
ゐり

此頭巾中須ハ腮まで出るやゝふ後ぎ目の下ゝゝゝふ人ゐる程ふ製ゝゝゐ系明和
八年黛山黙前句附うつぶいてゐるく」とゝふ「ぞえ人ゐ鼻を用る袖頭巾」と附
なるゐり。又我衣ふ記ゝ如く昔ハ男もかゞりゝゐる風俗陀羅尼宝暦十年
尺童点集ふ

「いつころふたやり男の袖頭巾」とふ名なり 当世不向語 明和元年印本 高

祖頭巾と見えたり

十八 追考二條

上巻 九 お事の追考 著聞集 飲食部に「左京大夫顯輔卿のもと、或人おとゝ殘しておくりとゝけるふ梯花ぐさ〜るどまうりるを僧ども「あやらろふてふ」るを二品連歌ふるん〜ぬりる 春の花えさ〜脱て見せよか〜

證尊法印つける さくらいむふいるふらうべき」

とゝのるを考るふ卿の許ふ集まるる僧よ喰せん料る故おとゝをしておくりとゝを

こ記〜るる。たゞく俗家ふ此河うつ〜ら。惜べ〜連歌ふ脱なり写誤もある

歌ゆえ雑〜。おとゝ則二度目の食。日の長き頃る事を梯のかぎ〜とゝの

ゆて知るゝの書建長六年ノ著。前ふ引〜 雑談集 の作者無住師の若き

甫捨箱 下 廿八

程ふ當て時代よく合を。されば上巻ふひい〜如く事始りい夜食始とゝふ

程の事るべ〜

中巻 八 涙法師の条を再考るふ今下賤の者少女をゆまとゝふ。發意。

坊ゆ對して尼といるるり 桜るゆ比丘も又古〜

守武千句 天文九年

いつゝ法師のうかび出ま〜

まうるも又まうるもゆま小舟

うけがさきてそ人身と知を

前ハ僧の事るを彼子法師ゆまるる〜。いつゝ男子の出生せん。まうるも又

まうるも女子るりと附るるべ〜尼を海士ゆいひうけうかひ出るの縁語ふ

小舟とゝひ流〜なるる。少女をゆまとゝふ俗言るければ比丘ゆ吟え雑〜

引ゆら〳〵ひゆら〳〵る事是のこゝろいかゝらぎれど見あらはさゞらさゝ〳〵

べゝと一条あゝそ筆をそでむ

[浄書　谷金川]

用捨箱下之巻了

[奥書箱下巻]

和漢洋書籍發行所

發行者　東京市京橋區南傳馬町一丁目十八番地　藤井利八

發賣書肆　東京市京橋區南傳馬町一丁目　松山堂書店

東京市神田區小川町十二番地　松英堂書店

東京市神田區小川町七番地　松陽堂書店

東京市神田區錦町壹丁目十番地　松山堂書店